

トラベル懇話会夏期セミナー

復興がんばろう能登

2024 年 7 月 5 日（金）～7 月 6 日（土）

7 月 5 日（金）12:00 に総勢 35 名の参加者が、時間通りに金沢駅に全員集合。

貸切バスで和倉温泉へ出発。

百木田会長による挨拶の後、晴天で猛暑の中、金沢から北へバスを走らせました。



途中は、海岸沿いに美しい森林の中を快適に進み、1 時間弱ほど進んだところでトイレ

休憩、その後里山街道を北東に進む。その頃になると瓦屋根にブルーシートが点在し、

震災の爪痕を直に感じるようになる。

和倉温泉街に近づくと、道路には時折亀裂があり、災害の生々しい状況が未だ残ってい

る事を感じる。和倉温泉街に入る。ホテルや旅館はどこも営業しておらず、人も歩いて

いないので、まるでゴーストタウンの様だ。

美湾荘の会長と社長である若女将が迎えてくれ、念の為ヘルメットと軍手・マスクが配

られる。美湾荘は和倉温泉の中でも老舗であるが、外観の損傷は少なく、内部もそれほどひどい状態ではない。

二手に分かれて、7階と庭に移動。湾に面した庭では護岸が崩れ落ちていて、建物にも亀裂が多く、解体する方向で進めているとの説明を聞く。

上階の客室は、震災当時のまま残されており、損害の大きさがわかる。



<多田会長からのお話>

広間で、多田会長よりお話を頂く。

発災直後は混乱したが、スタッフは必死にお客様を安全な場所に誘導しました。

私自身は、すぐ全館の様子を見ようと庭に出て見上げると、ベランダから助けを呼ぶお客様の姿を確認しました。すぐに部屋に行きましたが、震災の影響でドアが開かずに避難できない状態であることがわかりました。何とか複数の社員でバールなどを使い、ドアをこじ開け、無事に脱出できました。発災直後に庭に出たのが幸いしました。

その後避難所での状況が徐々に判明すると、貴重品や荷物を取りに旅館に戻りたいお客様がいるとの報告を受け、希望者を旅館に戻す決断をしました。社員は本当に責任感を持って的確に動いてくれて、感謝しております。

復旧はこれからですが、社員と共に頑張っていくしかありません。

今後ともよろしくお願いします。



その後我々は、40分ほど和倉温泉街を散策した。

どの旅館も壁に亀裂が見えるなどの被害があり閉鎖状態で、街にも人の姿はなく、寂しい状況を目の当たりにした。



<懇親会>

ホテルより徒歩3分の場所にある和風料理旅館「金沢茶屋」にて、真心こもった「おもてなし」と旬の食材を堪能しました。



<意見交換懇談会>

20:30 よりホテル日航金沢 30 階プライベートルームにて意見交換会が行われました。

各テーブルでの懇話や全員の自己紹介で大いに盛り上がりました。



<3 次会>



7月6日（土）10:00

美湾荘代表取締役 多田直未社長による講演

「震災と復興について」



昨日はご来館して頂き、被害の様子を実感して頂きありがとうございました。

<自己紹介>

東京の大学を卒業した後は、美湾荘の東京営業所出張所で営業活動に従事していました。

コロナ禍の2021年社長に就任。

社長就任後は、和倉全体の経済を住民と一緒に発展させていくという考えで、当時旅館

では珍しい素泊まりの受け入れに取り組み、率先して地元の人を採用してきました。

<発災当日>

16:10 本震発生。縦揺れでも横揺れでもない、ひっくり返るような揺れでした。

今まで和倉では、小さな地震は頻繁に発生していましたが、あのような大規模な地震は

ありませんでした。私は直ぐに館内放送でロビーに降りて頂くよう案内しました。

発災直後は怖がっていたスタッフも、直ちにお客様の誘導に動き、走って階段を駆け上

がり、着のみ着のままや、入浴中でずぶ濡れのお客様をロビーに誘導し、外の駐車場に

集めました。揺れが続く中、全てのお客様を迅速に誘導できたのは、スタッフ達の必死

の働きがあったからです。とても感謝しています。

大津波警報も出ていたので、すぐにお客様全員を避難所である公民館と高台の小学校に

誘導しました。その間一人の怪我人も出さずに避難所に誘導できたのは、スタッフ達の

責任感と勇敢な行動の賜物でした。パニックの中でもスタッフ達は、今自分に何ができ

るか、今何が必要かを一人一人考えて行動してくれました。本当に誇りに思います。

その後は避難所を往復し、食料や寝具を届けました。そもそも和倉の人口は 2,000 人程ですが、当日の宿泊客は 6,600 人、他に多くの従業員もあり、避難所のキャパシティが足りないのは歴然でした。備蓄も十分にはなく、旅館からの差し入れと寝具の提供で、何とか当館から避難したお客様のケアをしていました。夜になっても揺れは治りませんでしたが、徐々にお客様の意向を聞き取ることができ、金沢からなど近いお客様は、各自車で帰って頂き、一度旅館に戻りたい方は戻って頂きました。車中泊を希望するお客様には、食料と寝具を届け、お客様個々の要望にスタッフ一丸となって対応しました。朝になって鉄道や道路の状況が徐々にわかってくると、JR などでお越しいただいたお客様を何とか金沢までお送りすることに専念し、通行できる道を選んで、マイクロバスなどで輸送しました。

何とかお客様全員を送り出すことができた時には、本当にほっとしました。

バスの窓から手を振るお客様の、口の動きが「ありがとう」や「がんばれ」に見えて、思わず込み上げてくるものがあり、今も心に残っています。



<1月2日以降>

発災後、最初に来館されたのは NTTさんと北陸電力さんでした。

発災翌日に電話があり、何もなくても屋根があればいいので 13 人泊めてくれとの事で

した。たぶん電話に出たのが当館だけだったのではないかと思います。

電気は通電していた和倉では、暖房と灯は確保できましたので、泊まっていただきました。

奥能登はもっと悲惨だったと聞いていたので、復興に携わる人たちに泊まっていた

だくのは旅館の義務と私は考えました。

旅館の被害は尋常ではありませんでした。

護岸が崩れ落ちてしまい、庭の亀裂も大きく、これで終わったかなとさえ思いました。

水がないので、子供用プールで雨漏りの水を確保して、トイレの水を流すなどに使いました。それでも他の旅館に比べると、当館は軽症だったようです。

東日本大震災の際は津波による被害が大きかったと聞きましたが、今回の地震は地中が大きく揺動する事で、地中の配管や水道管が破損し、地形にも大きな影響を受けました。

放っておくと、旅館がこのまま海の中に落ちていくのではないかとさえ思いました。

幸い護岸の応急措置が今年中には着工し、解体も始まるので、少し落ち着いています。

それからは壮絶な断水の日々が続きます。

結局水道が通ったのはなんと4月でした。

七尾市の水は「県水」と言って加賀地方にある手取川から水を引いていましたが、

地下の送水管の修理は南から始まるので、一番北の和倉の修理は最後でした。

給水車は、2月中旬からやっとコンスタントに来てくれましたが、しかし館内の多くの配管に損傷があったので、その水を全館に流すのが非常に困難で、相当時間がかかりました。水道が通ったから解決ではなく、未だ館内に通水できてない旅館もあります。

誰もまさか4ヶ月も断水するとは思わず、本当に水の確保が大変でした。

それでもコンスタントに給水車が来るまでは、たまに来る給水車をお願いをして余った

水を供給してもらいましたが、そのうち「1 企業だけの為に供給できない」と言って断られる日々が続きました。どうせ捨てるのに納得できない。目の前に困っている人がいるのに、なんと融通の利かない人たちだと怒りさえ感じました。

教訓として、こういう状態で必要なのは水を汲める大きなタンクと、簡易トイレだと思いました。今は洗濯もでき、風呂も使えますが、4 ヶ月水のない生活は壮絶でした。

復旧作業の方々を 1 月 2 日から受け入れました。

他の旅館さんは電話も受けていなかった様ですが、私は奥能登への思いが強くありましたので、受け入れを決めました。

受け入れを決めたもう一つの理由は灯です。

和倉のまちが真っ暗になっていましたので、防犯の意味でも灯は必要と考え、門灯だけでも点けることにしました。そうすると徐々に追従する旅館も出てきて、5 月くらいには仮設住宅設置業者の方々も来る様になり、少しずつ店も開き始めました。

しかし今現在は誰も泊まっていません。

実は解体業者さんが続々と来てくれる予定でしたが、公費解体が遅れていて、仮設業者も政府が用意した奥能登の施設を使っているのです、非常に厳しい状態です。

なぜなら今でも社員には、100%ではありませんが給料を払っています。

雇用調整助成金は、以前コロナ禍では 10/10（上限 16,000 円）でありましたが、今では 4/5 で、上限が 8,600 円まで引き下げられました。

もちろん全員の給料をカバーできませんし、電気代や水道代も含めて、毎月数百万円が流出していきます。したがって復旧業者さんからの収入は低いですが、とても貴重でした。無いと本当に困ります。

先月、環境省が公費解体に関わる人は宿泊費を全額補助すると発表しても伝わっていません。支援策があっても、申請が煩雑で、入金にも時間がかかります。

元々復旧業者の人手不足もあり、色々な理由で能登半島の復旧が遅れているのではないかと思います。行政はもっと柔軟で、スピード感をもって対応してほしいと思います。

<メディア対応>

マスコミはたくさん来ます。

本来なら当館では無いと思いますが、他の施設が電話に出ないのか断るので、結局私が対応していました。

小さな地震で受け答えをすると風評被害を受ける可能性はありますが、ここまで、被害が大きいと、風評被害も何も気にすることはない、正直に助けてというしかないと思って対応してきました。

それでも一人で抱えるのは負担が大きく、今では少しずつ他館にお願いしています。

一度受けると続くのは知っていましたが、自分の責任だと諦めて、可能な限り取材を受けられるようにしています。

<社員に対して>

社員には今でも休業をしてもらっています。

発災後最初に社員全員に集ってもらったのは1月14日で、状況を伝え、方針などを説明しました。当初は費用がかかるかもしれないが、何とか修繕して、半年後くらいには再開できそうだと考えていましたが、調査の結果、大工事になる事が判明しました。

それでも社員とは最低月1回か2回は会う様にして、逐一情報は共有しています。

できることは少ないですが、会う事は大事だと思っています。

改めて当館は、いいお客様と素晴らしい社員に囲まれていると再認識しました。

<解体>

自費解体を決定し、荷物も運び出しも完了し、今はいつでも解体できる状態ですが、遅れ遅れとなっております。それでも今できることは進めていこうとして取り組んでいます。そうは言っても何年も社員を待たせられません。

旅館業は関連業者が多いため、地域に対しても責任もあります。

何としても早くオープンしたい気持ちです。

公費解体は複雑で制約も多く、時間もかかります。

しかし自費解体は自身の裁量でできますが、業者さんを自力で集めるのは非常に困難でした。当館は何とか自分たちのネットワークで業者を選定して進めていますが、公費解体にせよ自費解体にせよ、業者を集めるのには時間がかかります。

和倉温泉の喫緊の課題は、まさにこの「解体」です。

中途半端な言い方で申し訳ありませんが、今はスタートに立てたか立ててないかです。

<これからの和倉温泉>

これからの街づくりを住民と定期的に話し合っています。

若手を中心に、誰もが自分の事だけではなく、地域に対して何ができるのかを考えています。旅館業としても、どういった責任を果たせるのだろうか、どうしたら地域住民に貢献できるのかを考えています。人材が育ち、皆が幸せになる街づくりを提案していきたいと考えています。

未来に向かって立ちあがろうとしている和倉の人たちを、私は誇りに思います。

2次会・3次会と旅館に閉じ込めるのは良くはありません。お客様にも思い出が増えるというメリットのある「泊食分離」を進め、地域を活性化していきたいと考えます。

また、今後も積極的に地元の方の雇用を目指します。

広がりのある面の観光地になっていかなくてもなりません。

<最後に>

地震はどこでも起こります。

高いホスピタリティーと、お客様に対する責任感で、この街を防災に超強い観光地にしたいと考えています。日頃からの備えが大事です。備蓄を十分確保して、安心・安全を提供します。

この経験を活かして、新しい和倉温泉を造っていきたいと思いますので、その際には皆さん、ぜひ和倉温泉を紹介して頂き、送客頂きますようお願い申し上げます。

本日はありがとうございました。



<筆者より>

今回の講演を聞き、改めて被災された方々にお見舞い申し上げるとともに、早期の復旧・復興を心よりお祈りさせていただきます。また旅行産業として、有事の際の危機対応の大切さを改めて痛感いたしました。委員会の皆様を含め、この貴重なお話を企画・運営いただきました全ての方に感謝申し上げます。

水野 剛